

「春いっぱいの大学構内 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

4月中旬のよく晴れた日、3年生になったばかりの子どもたちと、大学構内の自然観察に出かけた。本校は、武蔵野台地の東端にある大学構内に位置し、さまざまな植物、多様な自然環境に恵まれている。



これは大きなツツジの植え込み。何百もの花が一斉に咲いて、子どもたちは歓声をあげていた。花に触れて、虫めがねでよく見て、匂いをかいで・・・中には少し蜜腺の味見をする子どももいる。一つの対象物でも、まさに五感を使って、その特徴をとらえようとしている。こういう姿を見ていると、子どもは「観察したい」という本能が、もともと遺伝子に組み込まれているように思えてならない。



モミジの観察をしているところ。子どもでも手の届く高さに枝が垂れているところがすばらしい。モミジ

といえば、紅葉(こうよう)のシーズンが観察適期と思われがちだが、実は今の時期にも観察させたい。花が咲いているのだ。



モミジの花は「風媒花」なので、小さくて目立たず、香りもない。柄(花柄)だけは長く、花が風によく当たるようになっている。中には小さな果実(翼果)ができかけている花もある。子どもたちは、普段見慣れているモミジにも、花が咲くことに驚いていた。



ここはかつての学生会館の中庭で、今は広い空地になっている。日当たりがとてもよく、春の野草がたくさん花をつけている。タンポポ、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ、シロツメクサ、カタバミ、オオイヌノフグリ、ムラサキケマン、ヘビイチゴ、ニガナ、ナズナ・・・特に珍しいものではない。しかし、子どもたちは、そんな雑草の花と、飽きもせずいつまでもたわむれていた。(つづく)